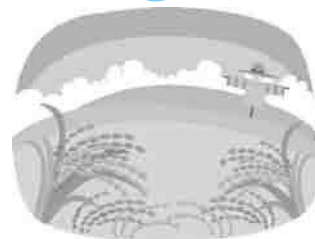


しまなみ農業だより

寒害の 予防策 と限界



かねてから厳冬の予想がなされていたとはいえ、今年の寒さは10年ぶりの厳しさで、特にレモンと露地（屋根かけ）せとかは残念な結果となってしまいました。樹上越冬完熟型の作型に取り組み以上負わなければいけないリスクとはいえ、もうちょっと何とかならんか。今月号は今季の気象を振り返りつつ、防寒対策としてできること、できないことをまとめてみました。

1 今年の冬は低温強風

今季の気象の特徴として、前半は強風を伴い、東予方面でも積雪が多かったことがあげられます。クリスマス頃と年末に最初の寒波が襲来しましたが、気温は0℃以上でさほど下がってはいませんでした。風向きにも特徴があり、冬の季節風といえば通常北西方向ですが、今季の風はすべて真北から吹いていました。1月に入り7日頃から0℃以下に下がる日が出始め、16日にマイナス3.1℃の今冬最低を記録、しかもこの時は前日から14時間以上わたって0℃以下が続いた上に、時折12m以上の強い風が吹いており、無風時の放射冷

却（瀬戸内での凍害の原因のひとつがこれ）により凍結するのは樹冠外周部ですが、このときは樹冠内部まで万遍に冷却されてしまったと推察されます。強風を伴う寒波は1月30日にも再度訪れていました。今季の後半は一転して無風の低温となり、2月13日にマイナス2.4℃の今季2番目の低温となりました。以上は岩城島赤石地区の海岸付近にあるしまなみ指導班での観測データであって、局地的にはより低温に遭遇したところもあると思われます。

2 防寒資材の得手・不得手

防寒対策も対象を樹全体とするか果実とするかで変わってきますので、ここでは樹上越冬させる果実を対象とします。果実袋、サンテ（黒いタイツ）、サニーセブンがありますが、それぞれ得意、不得意があることを知ってください。まず果実袋ですが、雨水寒風を遮断することにより風摺れや霜焼け状の寒風害の防止には非常に効果が高いのですが、保温効果はほとんど期待できません。2重袋でせいぜい1℃くらいです。サンテは果実袋に比べ処理しやすく、保温効果も期待できるのですが、雨水がしみこみやすい欠点があり、たとえば日中降雪があり、夜半になって一転無風の晴れとなった場合、果実上で解けた雪がサンテに染み込み、そのまま凍結してしまうことが考えられ、果実表面に障害が発生してしまいます（降雪の多い南予でサンテが採用されない理由）。最も保温効果が高いのがサニーセブンですが、これとて2℃程度で、マイナス5℃以下の低温に長時間曝された場合の保温効果は保証できません。また被覆方法でも保温効果は異なり、何らかの骨組みの上から

全体にすっぽり覆った場合の保温効果は高いのですが、樹冠ベタがけではサニーセブンに直接当たった部位で障害が発生します。

3 早期収穫のメリット・デメリット

本当においしい果実を収穫しようと思えば、ぎりぎりまで樹上で完熟させなければなりません。瀬戸内は最低気温が下がりやすく降雪も少ないため、越冬完熟が可能な数少ない産地なのですが、それでも突然の寒波で収穫皆無のリスクを常に負っていることを自覚してください。寒波襲来の予報でやむを得ず早期に収穫する選択肢もあつてし

かるべきと思いますが、昔の温州みかん・伊予柑と違い昨今の新品種は、貯蔵中に品質向上が見込まれるものは少なく、完熟品とは残念ながら別物となることが多いです。早期収穫・貯蔵品は別荷口となり価格が完熟品ほど振るわなかったとしても、それはしょうがないと受け入れなければいけません。



図1 今冬の気象の状況（しまなみ農業指導班）